

貨幣理論の發展

大森, 研造

<https://doi.org/10.15017/4150386>

出版情報：經濟學研究. 2 (2), pp.1-25, 1932-10. 九州大学經濟学会
バージョン：
権利関係：

貨幣理論の發展

大 森 研 造

世界大戰の勃發後に起りしインフレーション及びそれに關聯する通貨安定策は、貨幣理論の研究に對して未曾有の材料と問題とを提供した。従つてかゝる經驗並に問題に對して科學的立場を取らんとする試が、新に發生し來る本位史的な事實の規模と強度とに異常な魅力を感じたのは當然であらう。

第十九世紀の末葉及び廿世紀の初頭に於ける貨幣理論に關する文献は、正しき價值尺度と交換手段を撰ぶに如何なる本位制度が最も適するかと云ふ問題に支配せられてゐたのである。

一部分は既に古典的になつた Jevons, Chevalier, Knies 等の著述の如き、或は一九〇〇年以降に現はれた貨幣に關する文献、例へば Laughlin, Helfferich, Scott, Conant, Foville, J. F. Johnson 等の著書の如きも、程度の差こそあれ殆んど皆此の問題に制約されてゐると云つてよい。

所謂兩本位制論争——この論争は一八八〇年代より九〇年代に於て學問的にも實際的にも非常に世

- 1) Laughlin, Principles of Money, New York 1903.
- 2) Helfferich, Das Geld, Leipzig 1903.
- 3) Scott, Money and Banking, New York 1903.
- 4) Conant, Principles of Money and Banking, London 1905.
- 5) Foville, La monnaie, Paris 1907.
- 6) J. F. Johnson, Money and Currency, Boston 1906.

人の注意を引いた——の根底に横はるものも此の問題であつたが、十九世紀の末葉までは金が勝利を占めた。従つてその後には現はれた多くの貨幣に關する組織的な著述は、殆んどこの論争に對して決定的な立場をとり、金の勝利を歴史的に證明するのみならず、理論的にも肯定せんと努めた。

乍併、間もなく興味は比較的重要ならざる他の問題に移つた。勿論、兩本位制論争が鳴を鎮めてから、世界大戰の勃發に至るまで、約十五年乃至廿年間に、貨幣の理論的著述がなかつたと云ふのではない。特に理論的興味の薄らいだこの時代に、熱心に理論的研究に従事した二つの國、即ち亞米利加及び墺太利に於ては、貨幣の理論的方面に著しい業蹟を残した。その顯著なるものを擧ぐれば米國の Irving Fisher, Kemmerer, 墺太利の Wieser, Mises 等の如き是れである。

然し大體から見てこの時代には貨幣の理論的研究は中絶したと言つてよい。その理由は頗る複雑であり、その現象自身も只單に獨逸に於ける歴史學派の擡頭と云ふことのみを以てしては説明し得ない。勿論歴史學派の影響のあつたことは事實であるが、一層重要な理由は他に在る。兩本位制論争以降貨幣數量説が蒙つた不信用が則ち是れである。夫は單に兩本位制論者が特に貨幣數量説を利用したと云ふことばかりでなく、輿論及び通俗經濟學から見れば、貨幣論に於いて理論と云へば數百年このかた數量説であつた。従つて數量説から離脱することは必然的に理論から離脱することを意味したから

である。乍併、世界の著名な學者の多數が、やがて金準備の缺乏を來すべきものと確信し、陰に陽に兩本位制に秋波を送つた時代もあつた。

最近に於ける Cassel や Keynes がなす如くに、人々は金の將來 (die "Zukunft des Goldes") に就いて憶測を逞しくした。そして或者は稀少であるとし、或者は過剩であるとしたが、一般には金の將來を憂慮すべきものとなし、金の價値の相對的安定性を認識して兩本位制論者の危懼をあたらずとした理論家を黙殺したのである。

かくて本位政策上の基本的問題から多くの學者が排除されたと云ふことが、數量説自体を否認せしむる状態を誘致することとなり、數量説的傳統を誇るアングロサクソン系統の國々に於てすら、數量説に對する激烈な否認運動を發生せしむるに至つたのである。その頃獨逸も亦此例に洩れなかつた。

加之、米國に於ては Laughlin, Conant, Parker, Willis 等、獨逸に於ては Lexis, Lotz, A. Wagner 等、英國に於ては Nicholson, H. Withers 等、白耳義に於ては Ansiaux、佛國に於ては Nogalo 等に依つて盛に批判的經驗的な事實の研究が行はれた。

此等は爲替相場の理論に關する限りに於て、貨幣數量説と幾多矛盾せる結果を提示して數量説没落の運命を早めることに貢獻する所が大であつた。

である。乍併、世界の著名な學者の多數が、やがて金準備の缺乏を來すべきものと確信し、陰に陽に兩本位制に秋波を送つた時代もあつた。

最近に於ける Cassel や Keynes がなす如くに、人々は金の將來 (die "Zukunft des Goldes") に就いて憶測を逞しくした。そして或者は稀少であるとし、或者は過剩であるとしたが、一般には金の將來を憂慮すべきものとなし、金の價値の相對的安定性を認識して兩本位制論者の危懼をあたらずとした理論家を黙殺したのである。

かくて本位政策上の基本的問題から多くの學者が排除されたと云ふことが、數量説自體を否認せしむる狀勢を誘致することとなり、數量説的傳統を誇るアングロサクソン系統の國々に於てすら、數量説に對する激烈な否認運動を發生せしむるに至つたのである。その頃獨逸も亦此例に洩れなかつた。

加之、米國に於ては Laughlin, Conant, Parker, Willis 等、獨逸に於ては Lexis, Lotz, A. Wagner 等、英國に於ては Nicholson, H. Withers 等、白耳義に於ては Ansiaux、佛國に於ては Nogalo 等に依つて盛に批判的經驗的な事實の研究が行はれた。

此等は爲替相場の理論に關する限りに於て、貨幣數量説と幾多矛盾せる結果を提示して數量説没落の運命を早めることに貢獻する所が大であつた。

乍併、就中顯著であつたのは、實際問題自身の推移である。それは狹義の本位政策の領域に於て殊にさうであつた。即ち一九〇〇年の終頃までは、金本位制と兩本位制と孰れが正しきか々問題であつたが、一九〇〇年以後は、如何なる種類の金本位制が最も經濟的であるか々問題の重點をなすに至つたのである。

かゝる問題の推移の徴候として吾人は特に二つの有名な文献を挙げたい。その一つは Keynes の "Indian Currency and Finance" であり、他の一つは Knapp の "Staatliche Theorie des Geldes" である。

Indian Currency and Finance, London 1913 の著者である Keynes に就しては、その數量説的前提が彼を如何に極端な結論に導いたかは周く人の知る所であるが、その當時の印度の幣制に關する彼の著書に於ける根本的な立場は少くとも景氣問題には制約されてゐなかつたのである。

本位の基礎が金でなければならぬと云ふことは、彼にとつては自明の理であつて、彼が問題としたのは、科學的な確固たる基礎の上に、單なる價值の尺度としての金に満足し、支拂手段及び交換手段としての使用は之を他の一層廉價な貨幣に托することがより經濟的であると云ふことを證明することにあつた。

所謂金核本位制 (die Goldkernwährung) は妥當視さるべく且つ典型的な植民地本位制の立場からして推賞さるべきものであつた。

暗黙裡に支拂手段としての貨幣の數量説的概念から出發して、金の意義を小額取引及び對外交拂に對する補助手段に限定することに努力したことは、國際貸借の自動的調節 (古典學派の意味に於ける) の代りに割引政策に依る爲替相場の人爲的統制が行はれることを示すためであつた。

根本的には同一の問題と目的とが Knapp の貨幣國定説 (Staatliche Theorie des Geldes, München u. Leipzig 1905) にも現はれてゐる。彼が問題としたのは塊太利の金本位——その特徴は、銀行券に對する法律上の兌換強制の缺除、及び壓倒的に銀行券が流通したと云ふこと——が對内並びに對外交引に於て自由な金の流通を伴ふ古典的な金本位制即ち英國のそれと同じであることを示すにあつた。

彼は創設者としての歡喜から——金核本位制は既に十八世紀に於て、スコットランドの銀行の採用する所となり、Ricardo に依つて推賞せられ、印度の實驗以來周知されてゐたのであるから、實際は Knapp に依つて創説されることを要しなかつたのだが——Keynes 以上に進んで、從來の貨幣理論的、本位政策的文獻を金屬的 ("metallistisch") なる言葉を以て嘲笑した。

だが彼は金屬學派が論究せねばならなかつた實際問題、換言すれば正しき本位の撰擇と云ふ問題を眼中に置いてゐたのではなく、たゞ安固な金本位制と云ふ見地からこの問題を振り返つて、金屬學派の問題設定を時代後れなりと一蹴したに過ぎない。

實は Knapp 自身も——少くとも貨幣國定説の第一版に於ては——善き意味に於ての實際的金屬論者であつた。即ち彼は金本位制或は金への平價に方向づけられ、夫に固く結合する所の本位制度を自明の理なりと前提してゐたのであつて、只彼の鋭い論難は、自然法則的な論證に依つてその愛好する金屬を辯護する單本位又は兩本位制の狂信者に向けられたに過ぎない。

更に他の方向、即ちアングロサクソン系統の文献に於ける數量説的根本思想の強き主張——この根本思想が商品側と貨幣側との關係に於て、商品側が價格に對して決定的であり、貨幣は寧ろその反射であると解釋されるならば——が起つた。

目的意識的に數量説の結果を狙はんとする傾向（例へば Fisher, Seligman⁷⁾）が米國に於いて現はれたが、勿論（Laughlin, I oz 等の）商品價值説（die Warenwerttheorie）に依つて徹底的に拒否せられた。

更に既に兩本位制に依つて示され、Knapp、及び Ansiaux⁹⁾ に依つて強調された方向——即ち爲替相場は正統學派が主張するやうに自動的に均衡するものではなく、その統制には寧ろ計畫的な干渉が必

7) Irving Fisher, Purchasing Power of Money. New York 1912.

8) Sellgmann, Principles of Economics, New York 1907.

9) M. Ansiaux, Principes régulatrices des changes, Bruxelles 1912.

要であると云ふ説——への今後の發展が著しく準備された。此の事は國際貸借の自動的調節を固持する正統學派に對する重大なる挑戰である。

その頃數量説的傾向を有する者が數量説の根本的思想を批評したり、或は數量説の反對者が數量説的思想を主張するなど頗る奇異な現象を呈したこともある。

乍併、例へば金の國內流通は望ましいか否かと云ふ様な技術的な個々の問題に對する興味が、理論的な根本問題に對するそれよりも強く、爲替の自動調節に代るべき本位政策が依據すべき基準如何と云ふやうな問題は、本質的には未だ闡明されなかつた。唯爲替相場或はその平價は——僅かな例外を除いて——自明的な究極の目標或は前提として妥當し、國內物價水準如何と云ふ問題は、其とは獨立に云はゞ分業的に銀行及び景氣の研究に屬すべきものと見られた。

この狭い本位政策的領域と同様に、銀行政策に關する貨幣理論の問題も亦既に早くから準備せられてゐた。

一九六〇年代或は其以前にも遡り得る銀行主義の論争は、第十九世紀の終に於て既に陳腐なものとなつてゐたのであるが、唯兩者に共通する點は、程度の差こそあれ、金融市場の自動調節に對する獨斷的信仰であつた。

銀行支拂手段の本位政策的意義を素朴に否定する通貨主義は、米國の F. Walker 等を除いて、第十九世紀の終りまで熱心な代辯者をもたなかつた。

就中、ビールの銀行條令の經驗及び大陸に於けるその模倣は、銀行券の總額を決定する主義又は三分の一準備主義が爲替相場には關係あるも、豫防的或は恐慌防止的な景氣政策について何等關係なきことを示した。

銀行主義を奉ずる銀行實務家は自由放任主義を拒否し、理論家も亦六〇年代以來一層有効に景氣變動を調節するために、發券銀行に對して金融市場に於ける計畫的な割引政策的干渉を要求したのである。預金銀行の烈しき集中及び預金信用に比して銀行券の減少したことは、割引政策的意義に關する問題設定を十九世紀の終頃から新たな方向に導いた。

Chevalier 及び Bagehot 以來、恐慌の經驗に照らして、發券銀行の豫防的干渉的な利子政策に對する準則を得ると云ふことが問題の重心であつたが、今や發券銀行は何であるべきかと云ふ問題に代つて、發券銀行は一體何を爲し得るかと云ふ問題が前景に現はれたのである。

預金銀行に於て流動的手段が數字的に壓倒的であると云ふ事實に照らして、發券銀行は金融市場に於てその割引政策に如何なる意義が賦與せらるべきか。それは公開市場に何等かの指導的影響を有す

るか或は單なる消極的な傍觀者の地位に甘んずべきであらうかが問題となつた。

然し發券銀行の割引歩合が普通の場合大して効果のないと云ふことは (H. Wither) 英國に於ては既定の事實と考へられ、獨逸に於ても *Plange* 等によつて、發券銀行が——獨逸に於ては西方諸國に比べて私立銀行の流動割合が非常に少であり且つ中央銀行と金融市場との聯絡が非常に密接であると云ふ事實があるにせよ——如何に金融市場の支配力に欠けてゐるか、明かにされた。

以上の如き曲折を経て、曾て部分的には所謂通貨主義、銀行主義論争の中心題目であつた信用理論の根本問題、即ち銀行貨幣の價格決定的意義及び景氣變動に於けるその役割如何と云ふ問題に到達したのである。

乍併、この問題の取扱方は、大戰前十年間に於ては、かの有名なる銀行主義者の古典的論争時代のそれとは著しく異つてゐたのである。

尤も一方に於ては、信用貨幣に依る總ての通貨膨脹可能性を否定し、或はさうでなくとも單に經濟的發展の潮流に順應してその信用政策を決定する所の信用銀行に比して、國家的に統制されたる發券銀行に極く僅小な意義しか認めぬ極端な銀行主義論者があり、また他方に於ては、銀行貨幣を以て價

格決定に有力に作用する貨幣數量と見做し、總ての景氣變動を (M₃又は Juglar に倣つて、信用政策及び利子歩合の變動に還元せんと努め、或は Sombart がなしたる如くに景氣變動の原因を金の分量の變動に求める等、要するに、貨幣數量の決定的意義——貨幣の價値の變動を除去するには、貨幣の數量を統制すれば充分であるとなす¹⁰⁾——を固く主張する極端な數量論者もないではなかつた。

この方面を最も精密に考察したものは、恐らくは一八九五年に現はれた K. Wischell の "Geldzins und Güterpreis" であらう。

乍併、大體に於てこの兩方面に於ける極端な見地は寧ろ例外に屬し、大勢は最後の理論的決定を避けて實際を批判的に検討すると云ふことであつた。

Somary, Lotz, A. Weber, Jaffé, Plenge, Landmann, Schumacher, H. Withers, Palgrave 及び其他の銀行政策に關する著書には、此の因果的な因子を追求する努力が明かに現はれてゐる。

然し此等について只一つではあるが完全な一致點があつた。それは總ての論争に對して共通の基礎をなした所の發券銀行の統制といふことが、學問的にも實際上にも支配的なものとなつたことである。詳言すれば、金融市場及び資本市場を統制しつゝ而かも景氣政策を行施しながら干渉する可能性が存すると云ふこと、即ち所謂自由放任主義では駄目で寧ろ計畫的意識的な發券銀行に對する干渉が必

10) A. Spiethoff, "Die Quantitätstheorie als Haussetheorie" (A. Wagner Festgabe 1915) D. H. Robertson, A study of industrial fluctuation, London 1915, Lescure, Les crises générales et périodiques de sur-production, Paris 1907.

要であると云ふことである。

これからして、利子歩合と物價水準或は景氣との關聯如何の問題を、數量説的に検討することが起るべき筈なるに、事實は期待を裏切つて少數の例外を除いて數量説的検討は起らなかつた。少くとも學問の上での輿論は、金融市場現象の數量説的解釋には決定的に反對であつた。

本位政策的文獻に於ける大體の傾向は、爲替相場を決定的な標準とし（物價水準も亦爲替相場に依存する）更に爲替相場は國際貸借に依つて決定されるものと見、かくして數量説的な問題設定を迴避した。この事は銀行論的文獻に於ても同様であつて、即ちその殆んど大部分が純技術的私經濟的色彩を帶び、加之、特に金融問題、資本の各生産部門への配分の組織如何と云ふ問題を取扱つてゐたからして、貨幣理論的な問題設定などは目立たなくなつてしまつた。Veblen, Joidel, Hilferding等に依つて喧傳された産業資本と金融資本の勢力關係如何と云ふ問題までが、銀行理論的興味を多量に吸収したのである。

世界大戰勃發以後の貨幣理論的研究を概観せんとする時、先づ年代を如何に區分するかは困難に逢着する。

獨逸に於ては例へば Sonary の “Bankpolitik” 及び Wieser の “Theorie der einfachen Wirtschaft”

等の如き重要な著書が、大戰勃發後に現はれたが、その全體の内容から云へば戦前に屬する。従つて一九一四年を以て貨幣理論發展史上の境界石となすことは困難である。

大戰中及び戦後に於て數十年の昔に逆戻りした貨幣理論の研究は、最近漸く大戰前の水準に復し或は將に越えんとしてゐるかに思はれる。即ち理論的思索の衰退に次いで、貨幣數量説が時代の寵兒となり、英國、瑞典、亞米利加より出で、更に他の歐洲諸國を席捲したのであるが、最近一つの反動が（戰前の考方に復版）醸成されてゐる。而してこれは獨逸の學界に於て最も著しい。簡言すれば大戰中に於ける後退に衝撃を與へた本位政策的發展である。

インフラチオン及び之に次ぐ本位不安定時代は、極端な改革案——特に此の改革案が社會改革又は變革と結合せる場合——に對してよき養育地を與へた。

此等の改革案はインフラチオンの終熄と共に鎮靜したが、その理論的收穫が少なかつただけに、實際上の弊害も少なかつた。インフラチオン時代に獨逸の本位制度改革に關する二三の著書が發表された。此等の多くはパンフレット又は新聞紙上に發表されたが、其他或は純粹の通貨膨脹論者の著述中に、或は平價切下又は舊平價への復版その孰れにせよ本位改革論者の著述中に、或は貨幣經濟を自然經濟に依つて置換へるための貨幣全廢のユートピヤンの中に、或は Knapp を出發點とする名目

學說を經濟理論的に若くは經濟政策的に基礎づげんとする試みの中にも現はれた。

國際的に見ても、最近十數年間の貨幣理論的研究は、實際の經濟政策的問題設定に依つて制約されてゐるが、この事は必ずしも理論に對して好結果を齎すものではなかつた。

當時次の如き貨幣政策上の大問題、即ち第一は、物價騰貴の原因は何んであるかと云ふ問題、第二は、インフラチオンを除去するための手段方策如何の問題、及びインフラチオンに惱める國が採るべき本位政策の目標如何と云ふ問題、第三は、本位關係の社會的効果如何等の問題があつたが、問題解決のために却つて理論が問題に引きづられ、解決案を提示するとき、常に實際問題が理論に決定的影響を與ふるが如き状態であつた。

要之、最近十數年間の純粹貨幣理論的文献は、科學的に考察して大體二つの特徴を示してゐる。

その一つは其等が正統學派時代に於ける程の鋭さと結論とを有しないが、依然として數量說に支配されてゐるといふことである。

その二はこれと關聯して、物價水準、爲替相場及び景氣變動は貨幣側から従つて實際的には信用政策に依つて調整され得るや否やと云ふ本位政策の根本問題に對して躊躇なく肯定的立場をとつてゐると云ふことである。

更に實際的效果からではなく寧ろ學說的立場から興味を引いた二つの問題がある。その一つは、貨幣單位の所謂表券性 (Charakter) の問題であり、他の一つは、貨幣は合理的經濟組織に對して不可缺のものなりや否やの問題である。

此の第二の論争問題に刺戟を與へたのは Otto Neurath¹¹⁾ の著述である。

彼の根本思想は、現存の市場と物價とに基底を置く經濟組織を、それらの摩擦に鑑み他の一層合理的な組織に置き換えやうと云ふのである。かゝる合理的統制經濟の模型として彼は戰時經濟 (Kriegswirtschaft) を擧げてゐるが、大戰の終熄後に、彼及び彼を信奉する人々の間に一つの社會化案が成立した。

それは所得及び權力の分配の改革と云ふことには餘り觸れないで、最初は純生産政策的、流通政策的改革に對する一つの案として考へられ、戰時中には軍事化された經濟の計畫的な組立として宣傳せられた。その根本思想は所謂自然經濟の思想であつて、即ち貨幣の存在を前提とする價格構成を、各生産部門への生産手段の合理的配分及び生産物の消費への合理的配分の組織に依つて置き換へることである。

その目的は最初は決して社會主義的のものではなく、單に無駄な費用——生産の規格化の缺如によ

11) Otto Neurath の著書には Durch die Kriegswirtschaft zur Naturalwirtschaft, München 1919. Wirtschaftsplan und Naturalrechnung, Berlin 1925. Vollsozialisierung, Jena 1920 等がある。

る競争から生ずる費用、廣告費用、或は不完全に利用された運送及びその他の勞務から生ずる費用等——を除去すると云ふことであつた。これからして、貨幣使用の必要性又はその合理性如何、従つて貨幣の職能如何と云ふ問題が提出されたのである。

この問題は貨幣理論史上最も古いものであつて、遠くは Aristoteles の昔にも遡り得べく、直接交換に比して間接交換の便利なることよりして貨幣使用の必要性を認むることは十七八世に於て既に解決された問題である。¹²⁾

彼の計畫經濟に於ては、價值尺度としての貨幣も消失するかの如く見えるが、貨幣に代つて現はれるものは原始的な交換取引ではなくて、或る種の差引勘定 (“Abrechnung”) であらう。然し彼は貨幣なくして合理的な計算が如何にして行はれ得るかについて何等積極的な叙述をしなかつたから容易く非難された。Mises¹³⁾ の如きは、若し公分母としての貨幣の使用やむときは、計畫的な費用計算及び振替の形式、其他資本創造の形式によつて將來を合理的に考慮することも、更に純収益及び利廻を計算することも不可能であると強く主張してゐる。

Neurath は結局原始的なユートピアを語るに過ぎない。貨幣計算なければ經營の成否を判定すべき標準及び生産を需要に適合せしむる可能性がなくなり、又生産手段を現在の需要と將來的需要とに配

- 12) A. E. Monroe, Monetary theory before Adam Smith, Cambridge 1923.
13) L. Mises, Die Gemeinwirtschaft, Jena 1922. S. 119 ff.
Die Wirtschaftsrechnung im sozialistischen Gemeinwesen, im “Archiv f. Sozialw.” 47 Bd. 1920.

分することも、その調節者たる市場利子がないので、合理的な標準を欠ぐことになるのであらう。

貨幣計算なき近代的な信用經濟を組立てることは全く考へ得られない。

ノイラートの誤謬は、結局固有の意味の管理經濟の目的、即ち戰爭中戰爭手段を管理する目的と、普通の場合の經濟組織の目的との混同に基づく。即ち前者には例へば一定の食料を以て國民を賄ふが如き、或は特定の兵器工廠に勞働力及び材料を使用すると云ふが如き一義的に定つた具體的な任務が課せられてゐるが、後者は人間の變動してやまぬ種々の欲望を問題とし、その任務は特定の目的達成と云ふ意味に於て實質的具體的に定まるものではなく、寧ろ總ての或は大多數の經濟主體に對する經濟的效果如何に依つて定まるのである。

自然經濟に於ては貨幣計算に代はる如何なる計算がなされるかについて彼は明かにしてゐない。

後に彼は所謂生活氣分 (Lebensstimmung) なるものは數字的に把握し得ないものであることを認め、此を客觀的な生活狀況 (Lebenslagen) を以て置き換へだが、効果に於て變りはない。

同様の事が Otto Leichter¹⁴⁾——彼は古き集産主義的思想を更に徹底して最近社會主義的社會に於ける貨幣計算の問題を論じてゐる——に就いても云い得るが、其詳述は他の機會に譲る。

所謂自然經濟 (“Naturalwirtschaft”) なる思想は兎に角社會主義理論の根本問題を提出したと云ふ

14) Otto Leichter, Die Wirtschaftsrechnung in der sozialistischen Gemeinschaft, Wien 1923.

功蹟があるが、貨幣國定説並びに之に關聯する文献に對しては同様の効果を期待し得ない。

貨幣國定説の根本思想は論争的であつて、貨幣の本質は金屬的 (metallisch) でなく、名目的 (nominalistisch) 表券的 (charakteristisch) に理解されるべきものであるとする。

名目的即ち貨幣は獨自のものであり、何等實質的満足と與ふるものではなく、只流通的満足をのみ與ふるものである。而して貨幣單位が表券的であると云ふのはその通用 (寧ろ貨幣片の通用) が國家の宣言 (staatliche Proklamation) によるからである。

此事からして、クナツプは次の如き結論を下してゐる。曰く『本位及び貨幣の分類は、貨幣片の素材的性質如何、或は Gresham の法則が行はるゝか否かによつて分類せらるべきではなく、本位行政内に於て各貨幣が占むる位置如何、或は外國に對して本位貨幣及びその相場に關してこの行政が如何になれてゐるかに依つて分類さるべきである』と。

クナツプに依れば、何が本位貨幣であるか、如何にして現存する債務關係は整理さるべきかと云ふことは、貨幣價值とは何等關係なく、本位行政の實際の遣方如何に依存する事柄である。

本位間の相場 (der intervalutarische Kurs) と雖も貨幣價值によつて制約されるのではなく、寧ろ所謂汎軸的關係 ("panopolischen Beziehungen) からも知り得る如く、爲替手形に對する需要供給の

産物である。

クナップの論難の筆は、本來の金屬學說に對しては勿論のこと、總ての數量說、更に貨幣價値の概念自體に對してまで向けられてゐる。この論難のために、且つクナップ自身が自分の立場の基礎付に對して多くの矛盾を犯してゐるために、¹⁵⁾此の貨幣國定說から種々の貨幣價値問題を生ずるに至つた。

根本に於てクナップがかくも強く主張する所の表券說と金屬說との對立は如何に理解せらるべきか、此の問題に關して、クナップを辯護或は否定する多くの文献は、少くとも次の五つの異つた解答を與てへゐる。

(1)、貨幣國定說は貨幣價値の問題とは異つた獨自の問題を提出してゐると。

この事は Lexis が指示し、¹⁶⁾ Altmann が詳細に述べてゐる所であつて、即ち、貨幣國定說が提出した問題は、貨幣の本質及びその價値根據如何の問題、即ち貨幣價値を問題とする動的又は量的 (dynamisch-quantitativ) な問題設定に對立して、靜的又は質的 (statische oder qualitative) な問題の設定であるとする。

然し實際に於ては價値根據如何の形式的問題、貨幣職能の定義は、それが貨幣價値の高さに對して決定的であり、又その他の關聯がある限に於てのみ重要性をもつのである。

15) M. Palyi, Der Streit um die staatliche Theorie des Geldes, München u. Leipzig, 1922, S. 50 ff.

H. Döring, Die Geldtheorien seit Knapp, 2 Aufl. 1922.

16) Altmann, Zur deutschen Geldlehre des 19. Jahrhunderts, (in der Festgabe für Schmoller, 1. Bd. Leipzig 1908.)

純形式的な貨幣の定義（貨幣 ≡ 支拂社會の宣言されたる支拂手段 Geld ≡ proklamiertes Zahlungsmittel einer Zahlungsgemeinschaft）によつて貨幣國定説を他の多くの學說から區別することは困難であらう。

(II)、貨幣が與ふる所の純粹流通的満足に關するクナップの主張は、通常商品と對立しての貨幣の評價と云ふことが問題とならないで、寧ろ交換過程に於て貨幣の價值を一定と考へる本位に就いての粗笨な經驗に基因する。

此の經驗を一般化するとき、宛も貨幣の價值評價は一般に存在せず、少くとも國內取引に於てさうである（貨幣の價值評價がない）かの如き考に到達する。

かくて貨幣の價值問題は、貨幣國定説の視野から全く姿を消し、貨幣國定説は Bortkiewicz¹⁷⁾ 及び S. Budge¹⁸⁾ 等が考へた様に、純粹法律學的考察方法と化し去るか、或は一種の行政學即ち貨幣制度に關する行政方策の組織化及び叙述といふことになつてしまふであらう。

此事からして、Bortkiewicz は貨幣價值を説く Knapp 信奉者に對して、彼等は貨幣價值の概念、從つて支拂手段の經濟的評價一般の可能性を否定する學說に貨幣價值論的な結論を結び付けてゐると非難してゐる。

17) Bortkiewicz, Die Frage der der Reform unserer Währung und die knappische Geldtheorie, in Brauns "Annalen" vi. 1918.

18) S. Budge, Vom theoretischen Nominalismus, in Conrads Jahrbüchern, 1919. 113 Bd.

(III) Knapp の立場に對して、以上とは異つた解釋を與ふる時（此事は可能である）特に貨幣が與へる純流通的満足と共に更にも一つの満足即ち特種なものではあるが、價值構成が考へられてゐることに注意するとき、Bortkiewicz の此の非難は當らなす。

勿論クナップは此の特殊な評價の仕方に關して説いてはゐないが、仔細に觀察するとき、流通的満足の意味は財貨の獲得であること、其は結局一つの實質的満足を指示してゐること、従つて貨幣に對して少くとも高位の財貨と同種の評價を與ふるものであると推測せざるを得ない、然らずんば國定説と金屬説との對立は學問的は何等の興味もない架空的な對立となるであらう。

此の點に關して貨幣國定説は——クナップは看過してゐるが——數量説と本質的に同じである。即ち數量説も亦貨幣の素材價值は勿論その使用價值をも否定する。かゝる基礎の上に、限界効用説の信奉者ですら數量説の主觀主義的な基礎付けに到達した。

ミーゼス¹⁹⁾の如きは貨幣を第三種の財として、第一種第二種の財（消費財、生産財）から區別した、然しくナップの弟子達は師の教に倣つて、貨幣の價值概念を展開しやうとは試みなかつた。

(IV) 貨幣が與ふべき所謂流通的満足に關するクナップの主たる論證は「人は貨幣所有者として、同時に債權者、債務者であるといふ特殊の事情にある。従つて債權と債務とは相殺されるといふこと」

19) L. Mises, Theorie des Geldes und die Umlaufsmittel, 2 Aufl. 1924.

である。

これからして直ちに貨幣に對する經濟主體の一種の中性的立場が出て來る。R. Kaulla²⁰⁾の相殺説 (Kompensationstheorie) の如きもその論據を茲に持つ。

此から出發して、貨幣の價値は正に此の相殺可能性 (Kompensationsmöglichkeit) に依存し、支拂手段として使用され得ることが、貨幣價値の本質及びその大きさを決定するとの結論に到達することは容易である。

カウラーは次の如く説明してゐる。『貨幣本質を理解する鍵は、個人間の關係に非ず、一般交換取引に於ける貨幣の支拂手段としての職能にも非ず、寧ろ貨幣所有者の貨幣發行者に對する關係にある。

この關係こそ貨幣の價値が基因する第一義的のものであつて、貨幣の流通可能性及び事實上の流通はその必然的結果に過ぎぬ』と、即ち貨幣の本質は夫が國家に對する債權を意味すると云ふことにある。

『然らば鑄造されたる本位金屬がそれに對して一種の占有質 (Fauspfand) として作用する所のその債權自身の内容は何であるか。その對象が不定であつて、その價値のみが定つてゐる所の國家の給付である。』²¹⁾と述べてゐる。

國庫に對し支拂手段として使用され得ることが、本質的な價値決定根據であると云ふ思想は、凡ゆる

20) R. Kaulla, Die Grundlagen des Geldwerts, Stuttgart u. Berlin. 1920.

21) Kaulla, a. a. O. S. 62 ff.

批評を受けたにも拘はらず、古くから今日に至るまで猶ほ多くの信奉者を持つ思想であるが、カウラーが如何に鋭く貨幣價値の相殺説を法律的側面に展開しやうと努めても、然らば此の相殺の基礎に立つて國內物價水準及び貨幣の對外價値を如何に説明するかの質問を受けるとき、行き詰らざるを得ないであらう。

なる程債權と債務とはその支拂の總體に於ては相等しいが、個々の經濟主體に於ては決して均衡するものではなく、相殺は貨幣にその價値の上限を與ふることが出来ても下限を與ふことは出来ないであらう。

この事は貨幣素材自體或は價値多き素材への兌換可能性或は數量調節が採用されやうと何等異なるところはなし。

さは云へ、カウラーの主張は表券説を經濟的側面に、即ち貨幣の價値の問題に向つて徹底的に突き進めた唯一のものとも見ることが出来やう。蓋しクナップの遵奉者の多くはクナップの主張とは一部分全く矛盾するやうな價値理論を立てゝゐるから。

(V)、銀行主義的思想をも加味して、數量說的名目説(財に對する指圖證券としての貨幣)と共にクナップの表券説を代表するものに Bendixen の著作がある。²²⁾

22) Bendixen, Währungspolitik und Geldtheorie im Lichte des Weltkriegs, 1916; Das Inflationsproblem, 1917; Das Wesen des Geldes, 2. Aufl. 1918; Kriegsanleihen und Finanznot, 1919; Geld und Kapital, 2. Aufl. 1920.

彼の著作は通貨膨脹的要求に投合して人氣を博したが、此の通貨膨脹的要求こそは大戦初期に於ける獨逸の貨幣文献の特徴をなし、ペンデクセンの著作の普及に與つて最も力あるものであつた。

表券説が名目説的に、即ち數量説の意味に解決せらるゝや否や、かゝる結論夫自身が論理的に必要なものではなくなるであらう。

此の表券説を名目的に解釋することは——Borkiewicz 等の反對論ありしにも拘らず——今尙ほ行はれてゐる。

乍併、此の二つを混同することは結局誤解に導く惧がある。何となれば、表券説には名目的とは本質的に異なる思想が存在する。即ち流通的満足は各時點に於ける債權、債務の均衡を意味し、かく解することに依つて貨幣の價值問題は、その對象を失つて消滅するであらう。その時に貨幣の價值問題を解決するのが指圖證券としての貨幣の名目的構成の目的ではあるまいか。

クナップの貨幣國定説及びその通俗化は、確かにインフラチオンの原動力に關する認識を誤らしめた。人も知る如く、獨逸に於ては殆んどインフラチオンが終熄する頃まで、例へば帝國銀行の經營者は、貨幣數量の増加は物價騰貴の原因にあらずして寧ろその結果なりと信じてゐた。

乍併、本位行政上の粗笨な貨幣理論的の考方の罪を、凡て表券説に負はせることは酷である。イン

フラチオン時代の安價な信用を得たことを喜びし人々も、インフラチオンの反面に信用市場の崩壞、消費者の購買力の減退のあることを知つてから後は、獨逸に於てすら貨幣數量の變化は價格決定の重要な一因子であるとの見解に一致した。

乍併、貨幣數量と物價水準との關係を仔細に検討する時、貨幣の價值に關する根本問題に就いての理論の一致は失はれるであらう。

貨幣數量説の信奉者と反對者との間には、次の如き諸問題即ち、

(一) 紙幣本位制下に於て、貨幣數量及び流通速度の側に於ける變動は、爲替相場及び物價水準の變動を充分に説明し得るか。

(二) 金本位制下に於て、金貨又は銀行貨幣の數量は景氣變動を決定するか、或は逆に景氣變動が前者を決定するか、又割引政策に依つて景氣政策を行ひ得るか。

(三) 更に一般的には、爲替相場と國內物價水準との關係如何が問題となる。貨幣數量其他に依つて制約される爲替相場の變動は、物價水準變動の原因なりや、將たまた結果なりや。

(四) 論争の理論的核心は、數量説は一般に、因果關係又は函數關係の表現なりや、或は單なる數量的關係の公式化に過ぎざるかの問題である。

即ち所謂數量說方程式(爲邊變數×爲邊變數=定数の値を定むるの關係)は因果的説明價値を有するや否や、特に次の如き意味に於て、即ち (a) 商品側の變動は貨幣側の變動より説明され得るか。(b) 或は方程式は單に一方に於ける變動は長い間に於て之に對應する變動が他方に起る場合のみ不能であることを意味するに過ぎないか。

(五) 方程式の一因子の變化は因果的な説明に對して、之を孤立的に“*ceteris paribus*”の前提の下に取扱ひ得るか。或は一因子の變化が、之に對應する一つ若くは多くの因子の變化を惹起することが方程式の因子の特徴に非らざるか。に就いて古くから論争されてゐる。

この貨幣數量說に關する諸問題に特に爲替相場との關係については次號に於いて詳しく述べるであらう。(未完)